## 長梅外と三洲父子

長梅外は文化七年（一八一〇）に大分県日田市に生まれた。名は允。号は梅外、南梁。初め医学を学んだが、後に漢学を志し、広瀬淡窓に師事した。

やがて独立して英彦山などで塾を開いていたが、詩作も好み、多くの詩文を残している。著書に『梅外詩鈔』、『梅外詩話』などがある。

梅外が英彦山で塾主をしていたころ、村上仏山とは親しくなって何度か詩会を開き、互いに行き来するようになった。仏山は「彦山の長南梁（梅外）を憶う」、「長南梁父子と別れて、夜の雨に思いをのべる」などという題の漢詩をつくって『仏山堂詩鈔』に収録した。

梅外は長男の三洲と共に勤王倒幕運動に加わったため、幕府の役人に追われる。『仏山堂日記』の弘化二年（一八四五）一月十五日に、仏山を訪問したが、その際、「野沢数馬」の変名を使って、こっそりと訪ねている。

やがて明治になると梅外は一時、長州の萩に移り住んでいたが、まもなく東京に出て行く。

長三洲は梅外の長男。名は苾。字は世章。号は三洲。天保四年（一八三三）九月に生まれ、幼い時から両親について学問を始めたが、上達はめざましく、「神童」といわれていた。やがて広瀬淡窓の「咸宜園」に入門し、三年余りの速さで最上級に上がる。詩文、書画にすぐれていた。

一時、広瀬淡窓の弟旭荘の塾にいたが、勤王運動に加わって西国を奔走。やがて幕府の逮捕を逃れて長州に行き、長州藩士となる。藩校明倫館でも講義。高杉晋作らと倒幕運動に参加し、幕府軍と戦い、小倉戦争、戊辰戦争にも参戦した。

三洲はやがて明治四年（一八七一）、官吏となる。文部少丞の時「明治学制」の基になった「学制五篇」を草したが、これは「咸宜園」の学制を参考にしたという。その後、文部大丞、宮内省御習書御用掛、文学御用掛などを歴任。その間、『三洲遺稿』、『書論』など多くの著書を残している。

三洲は水哉園出身の吉田学軒（漢学者）、末松謙澄（歴史学者・政治家）などとも親しくしていた。

（末松謙澄顕彰会　城戸淳一）